

NGHIÊN CỨU CẢI TIẾN PHƯƠNG PHÁP GIẢNG DẠY KĨ NĂNG ĐỌC HIỂU CHO SINH VIÊN NGÀNH NGÔN NGỮ NHẬT TRÌNH ĐỘ C1

Nguyễn Thị Đăng Thu*

Nghiên cứu này đề xuất cải tiến phương pháp giảng dạy kĩ năng đọc hiểu cho sinh viên năm hai ngành Ngôn ngữ Nhật, Trường Đại học Hà Nội, dựa trên khung CEFR và các nghiên cứu đã công bố. Dữ liệu nghiên cứu thu thập qua phân tích giáo trình C1 và khảo sát giảng viên, sinh viên. Kết quả cho thấy giáo trình cung cấp văn bản đa dạng về chủ đề, kèm nhiều hoạt động sư phạm, chú trọng rèn kĩ năng đọc nhanh, đọc kỹ, đọc chính xác. Tuy nhiên, sinh viên gặp nhiều khó khăn với mô hình dạy học tương tác như: hạn chế tiếp nhận từ vựng và Hán tự phức tạp; lúng túng xử lí ngữ pháp nâng cao; khó nắm bắt nội dung văn bản; thiếu kĩ năng tự học nếu không được hỗ trợ. Từ thực tế này, tác giả đề xuất mô hình dạy đọc hiểu theo ba giai đoạn (trước, trong và sau khi đọc) kết hợp linh hoạt các chiến lược đọc. Hiệu quả được kiểm chứng qua thực nghiệm 5 tuần: điểm thi cải thiện rõ rệt; đa số sinh viên cho rằng mô hình mới thú vị, hiệu quả.

Từ khóa: kĩ năng đọc hiểu trình độ C1, mô hình dạy học đọc hiểu tương tác, đọc hiểu theo ba giai đoạn.

this study proposes an improved approach to teaching reading comprehension to second-year Japanese-majored students at Hanoi University, drawing on the CEFR framework and relevant prior research. Data were collected through an analysis of the C1-level textbook and surveys with both teachers and students. The findings indicate that while the textbook offer texts of diverse topics and pedagogical activities with a focus on speed and intensive reading, students encounter many difficulties in interactive reading lessons. These include limited acquisition of complex vocabulary and kanji, struggles with advanced grammar, challenges in grasping text content, and the lack of self-study skills without teacher guidance. To address these issues, this study proposes a three-stage reading model (pre-, while-, and post-reading) that flexibly combines reading strategies. Its effectiveness was confirmed through a five-week experimental implementation: students' test scores were improved significantly, and most of them found the new model engaging and effective.

Keywords: C1-level reading comprehension, interactive reading model, three-stage reading approach.

日本語専攻 C1 レベルの学生を対象とした読解指導法改善に関する研究

本研究は、ハノイ大学日本語学科 2 年 基づいて読解指導法の改善を提案するも
生を対象に、CEFR の枠組みと先行研究に のである。研究データは、C1 レベルの教

* ThS., Khoa tiếng Nhật, Trường Đại học Hà Nội

Email: thunttd@hanu.edu.vn

科書分析および教師・学生への調査から収集した。

分析の結果、教科書は多様なテーマの文章と豊富な学習活動を提供し、速読・精読・正確な読解を重視していることが明らかになった。しかし、学生は相互交流モデルの授業において、複雑な語彙や漢字の習得の難しさ、高度な文法の処理への戸惑い、本文内容の把握の困難、支援がなければ自律学習力が不足する、といった課題に直面している。

これらの課題に対応するために、前作業・本作業・後作業の三段階からなる読解モデルを提案し、柔軟に読解ストラテジーを組み合わせを試みた。5週間の実験授業の結果、テスト成績は顕著に向上し、多くの学生が新しいモデルを「興味深く効果的」と評価した。

キーワード: C1 レベル読解力、相互交流モデル、三段階読解指導

はじめに

外国語学習において読解力は語彙・文法の習得や批判的思考の発展に不可欠であり、CEFR（ヨーロッパ言語共通参照枠）の C1 レベルでは学術的文章を正確に理解・分析する力が求められる。ハノイ大学日本語学部では『日本語上級読解』と『中・上級者のための速読の日本語』を使用しているが、語彙・文法の難しさや時間制限、戦略不足により文章理解などに課題がある。本研究は現状と課題を明らかにし、効果的な指導法を提案することを目的とする。

先行研究

（British Council, 2009）は、CEFR C1 レベルの読解において複雑な構文の理解、意味の推測、背景知識や論理的思考の重

要性を指摘している。また、日本語教育では（池田, 2016）が専門的文章の分析や比較理解に関する評価基準を示している。指導法としては、（国際交流基金, 2007）が提示するボトムアップ・トップダウン・相互交流モデルの併用や、（館岡, 2001）のスキーマ理論活用が有効とされる。さらに、（宮崎, 2014）は批判的思考の育成、（田中, 2018）は速読と精読の併用を提案している。ベトナムの研究では、（Thân Thị Mỹ Bình, 2021）が語彙・文法理解の課題を明らかにし、教材開発への示唆を与えている。本研究はこれらの知見を踏まえ、ハノイ大学における C1 読解指導と教材課題を分析し、有効な指導法を提案することを目的とする。

• 研究の目的と課題

本研究は、ハノイ大学における C1 レベル読解授業の実態を明らかにし、教材の特性と有効性、学習者の課題を分析することを目的とする。具体的には、教材が学習者のニーズに適合しているか、読解における主要な困難は何か、現行の指導法の有効性、そしてより効果的な指導法の在り方を検討する。

• 研究方法

C1 履修者 60 名と担当教師 5 名へのアンケート、教材『日本語上級読解』『速読の日本語』の分析、さらに提案指導法による授業実験を通じてデータを収集・分析し、C1 読解指導の課題を明らかにして教材開発やカリキュラム設計に役立てる。

1. 参照となる理論的枠組み

1.1. CEFR と C1 レベルの読解能力

CEFRは言語能力を6段階で評価する国際基準であり、C1 は「熟達した言語使用

者」とされ、複雑な内容の正確な理解、自然な発話、論理的文章構成などが求められる。読解においては、筆者の意図や論理構造を把握する力が重視される。C1 読解力には、幅広いジャンルの文章理解、高度な語彙・文法力、文脈や背景知識の活用、論理構成の把握、そして批判的思考による内容分析が必要とされる。日本語教育における C1 指導は、社会・学術場面での高度な言語運用力の育成を目的とし、スキーマ活用による能動的読解や、新聞・論文等を用いた実践的指導、速読と精読の併用、批判的思考の強化が重要視される。本研究では、これらの観点からハノイ大学における C1 読解指導の課題を明らかにし、指導法の改善を目指す。

1.2. 外国語教育における読解モデル

外国語の読解指導では、学習者が効率よく文章を理解し、読解力を高めるために、さまざまな理論モデルが提案されてきた。中でも、次の三つの主要な読解モデルが広く知られている。

1.2.1. ボトムアップモデル

ボトムアップモデルとは、文字・語彙・文法といった細部から積み上げて文や段落全体の意味を構築する読解法である（国際交流基金, 2007）。漢字や語の意味を認識し、文法構造を分析し、文同士の関係を整理することで主題理解へと至る。語彙・文法の定着や誤読防止に有効であり、特に初・中級者に適しているが、全体把握に時間を要するため、大量かつ迅速な読解が必要な C1 レベルには必ずしも適していない。

1.2.2. トップダウンモデル

トップダウンモデルは、スキーマや文脈を活用して全体の意味を予測しながら読む「上から下への読解法」で、ボトム

アップとは対照的なアプローチである（国際交流基金, 2007）。読解前にテーマ知識を想起し、タイトルやキーワードから全体を予測しつつ文脈で補うことで、読解スピードや情報処理力が高まり上級者に有効であるが、予測の誤りや知識不足が理解を妨げる可能性もある。

1.2.3. 相互交流モデル

相互交流モデルは、ボトムアップとトップダウンを組み合わせた読解法である（国際交流基金, 2007）。タイトルやキーワードで全体を予測し、語彙・文法や文脈から意味を構築・補完することで、全体把握と細部理解を両立できる。C1 レベルに有効だが訓練と指導が必要であり、本研究ではこのモデルに基づく効果的な指導法を提案する。

2. ハノイ大学における C1 レベル読解教材の分析

ハノイ大学では A1 後半から C1 まで段階的に読解指導が行われているが、B2 以降、特に C1 で難易度が急上昇し、学生・教師ともに成果に満足していない。学生からは「問題に答えるのがつらい」との声が多く、要因は文章の複雑さや語彙・文法の難しさである。現在 C1 レベルでは既存教材が使用されているが、その難易度の高さから指導法の工夫が求められている。

2.1. 『日本語上級読解』

本教材は、朝日カルチャーセンター教材を基に編纂され、上級者の読解力と日本語理解の深化を目的とする。日常・社会・文化など親しみやすいテーマを扱い、新聞やエッセイなど多様な文章を収録して語彙力強化や日本文化理解を促す。各課の文章（300～2000 字）は短・中・長の 3 ステップで構成され、漢字含有率は平

均 30%、すべて CEFR C1 に準拠して自然な表現に触れられる。本稿では各ステップから 1 本ずつ計 3 本を取り上げる。

〈表 1〉日本語上級読解の幾つかの読み物のデータ

順番	読み物名	文字数	漢字数	読み物の出典
1	日本茶	327	113	日本経済新聞『鐘』
2	あいまいな言葉	639	194	朝日新聞『天声名語』
3	物の心	1356	370	阿刀田高 朝新聞『夜の風見鶏』

本教材は日本の伝統文化から社会問題・科学技術まで多様なテーマを扱い、C1 レベルの学習者に実践的な読解力を養う理想的な教材である。各課はウォームアップ・キーワード・イラスト・内容問題・言葉の問題で構成され、①予測とスキーマ活性化、②速読・精読を通じた理解深化、③語彙・文法の定着という 3 段階で進められる。自然な日本語表現を通じて語彙力や文化理解も高め、複雑な文章やニュアンスを読み取る力を育成し、C1 レベルの到達目標に込えている。

2.2. 『中・上級者のための速読の日本語』

本教材は中・上級学習者が速く正確に読む力を養うことを目的とし、母語で培った読解技術を日本語に応用する速読法を提案している。精読中心から速読への関心が高まる中、「正確さと速さの両立」を重視し、スキミング（速い視線移動、トピック探し、内容推測、情報抽出など）やスキミング（文構造の理解、キーワード探し、段落並べ換え、正誤・選択問題、内容予測など）の技術を段階的に習得できる構成となっている。さらに情報抽出、予測力、スキーマ活用など C1 に必要な力を実践的に身につける工夫がされている。ただし内容量が多いため、授業では理論

を中心に扱い、練習は一部を取り上げ、残りは自宅学習とする必要がある。要するに、本教材は速さと正確さを両立させ、C1 学習者の速読スキルを体系的に育成する有効な教材である。

3. ハノイ大学における C1 レベル読解授業についての実態調査

3.1. 調査概要

『日本語上級読解』と『中・上級者のための速読の日本語』を併用し、C1 レベルの学生に全 15 回（各 100 分）の授業を担当することとなった。その準備として、読解指導の課題を明らかにするため、ハノイ大学日本語学部の教師と学生を対象に実態調査を行った。概要は以下の通りである。

・調査期間：2023 年 9 月

・調査内容：読解教材・読解教授法に関する実態

・調査目的：C1 レベルの読解授業の現状を明らかにし、学生が直面している課題や困難を把握した上で、授業改善のための方策を検討する

・調査対象：教師 5 名（日本語教育歴 10 年以上）、C1 レベル修了の 3 年生 60 名

・調査形式：該当テーマに関するアン

ケートを作成し、配布から 30 分後に回収

を把握する

・ **アンケート内容**：国際交流基金（2007）の『読むことを教える』を参考に、C1 レベル読解授業での活動について調査を行った。授業中に行われる 11 項目の活動について、教師に「いつもする」「時々する」「ぜんぜんしない」の 3 つから選んで回答してもらった。〈表 3〉

1. すべての新しい言葉の意味を確認する
2. キーワードや難解語の意味のみ確認する
3. 文法・文型の使い方を確認しながら読む
4. 接続詞・指示詞に注目して文や段落の関係を確認する
5. 絵・写真・地図などを手がかりに内容を予測しながら読む
6. 文章の内容について話し合う
7. 全体をさっと読んで筆者の主張など

8. 質問をしたり、段落の要点や中心文をまとめるなどの文章理解

9. キーワードを検索しながら必要な情報を読み取る速読的理解

10. 理解が難しい文章や段落をベトナム語に翻訳する

11. 全文をできるだけ丁寧にベトナム語に訳す

調査項目に基づく要求

教師への要求: 上記 11 項目を参照のうえ、順番を再構成し、効果的な授業の流れを作成することを求めた。

学生への要求: C1 レベルの読解授業に関する問題点について、学生に自由記述形式で意見を求めた。

3.2 調査結果とその分析

アンケート回収率：100%（教師と学生両者とも）

〈表 2〉教科書について

評 価	回 答 数			
	『日本語上級読解』		『中・上級者のための速読の日本語』	
	教師	学生	教師	学生
不適切	0	0	0	0
適切	0	16 名（約 27%）	0	40 名（約 67%）
かなり適切	2 名（40%）	34 名（約 56%）		5 名（約 8%）
非常に適切	3 名（60%）	10 名（約 17%）	5 名（100%）	15 名（25%）

〈表 2〉から見ると、C1 レベルの読解教科書の評価について、不適切率は 0 % であり、教師にも学生にも高い評価を受けた。

〈表 3〉 教師の授業での活動について

	いつもしている	時々している	まったくしない
問 (1)	0	1 名 (20%)	4 名 (80%)
問 (2)(5)(6)(8)(9)(10)	5 名 (100%)	0	0
問 (3)(4)(7)	3 名 (60%)	2 名 (40%)	0
問 (11)	0	0	5 名 (100%)

〈表 3〉から見ると、問 (1) 「すべての新しい言葉の意味を確認する」活動は1名 (20%) が時々実施し、4 名 (80%) はまったく行っていない。問 (2) ～ (10) の活動はまったくしない教師はいなかった。問 (11) 「全文をベトナム語に翻訳する」は 5 名全員がまったく行っていないかった。

＋教師への要求：「＊教師は (1) ～ (11) の項目から選び、参考にして順序を並べ替え、効果的な授業の流れを作成してほしい。」に対し、① (5) (6) (9) (7) (4) (8) (2) (10) 、② (6) (5) (7) (9)(4)(8)(2)(10)の 2 通りの順番が示された。2.2 項で紹介された読解モデルに基づいて考察した結果、学習者が文章の大意と細部の両方を把握できるようにするために、相互交流モデルに基づく指導法を選択していることが分かった。

〈表 4〉 教師への要求の調査結果 (読解授業の方法・方策について)

指導法	回答数
ボトムアップモデル	0
トップダウンモデル	0
相互交流モデル	5 名 (100%)

＋学生への要求：C1 レベルの読解授業の問題点を学生に自由記述で質問した結果は〈表 5〉の通りである。多くの学生が直面している困難を以下のように整理・

集計した。10 名は無記入、27 名は 1 つ、14 名は 2 つ、9 名は 3 つの意見を挙げた。計 82 件の意見は内容の重複により 7 つのグループに分類された。

〈表 5〉 学生の C1 レベル読解授業の問題点について

順番	意見人数 (60 名中)	C1 レベル読解上の問題点
1	16	複雑な単語や漢字が多く、教師の説明がないと理解しにくい
2	14	複雑な文法や表現が多く、教師の説明なしでは理解が難しい
3	12	段落分けはできるが、内容理解は難しい

順番	意見人数 (60名中)	C1 レベル読解上の問題点
4	11	時間制約で読解問題を全て解けないことがある
5	10	心理的なプレッシャーで全部解けないことがある
6	10	スキーマがないテーマは理解が難しい
7	9	読解スキルが不足し、教師の指導がないと問題を解けない

4. C1 レベル読解授業為の新しい提案

本研究では、スキーマ理論に基づくトップダウン・ボトムアップの読解ストラテジーと相互交流モデルを用い、C1 レベルに適した指導法を検討した。辞書に頼

らず速読し、キーワードや予測を活用する方法を重視し、「予測→読解→確認→まとめ」の流れで学習者が能動的に理解を深める授業モデルを提案する。これは表6を基に発展させ、表5で示された学習者の困難への対応も組み込んでいる。

〈表6〉新しい授業モデルの提案: 学習者の問題点に対応する三段階読解指導

手順	授業の流れの詳細
前作 業 トッ プ ダ ウ ン 活 用	絵やタイトル、キーワード、マインドマップなどで内容を予測し、ペア・グループで話し合う。雑談を交えて関心や想像力を引き出し、知識・経験を活かした発話で学習への意欲を高める。 ① 背景知識が不足する（問題点6）に対し、スキーマの活性化を促す ② 授業への心理的な負担（問題点5）を軽減 ③ 興味・関心を高め、授業に前向きな気持ちを作る
本作 業 ボト ム ア ッ プ ・ ト ッ プ ダ ウ ン 活 用	本作業1（速読・予測確認） 文章をざっと読み、予測と照らし合わせて大意をつかむ。設問に素早く答え、細部にこだわらず、全体の流れや要点を把握（トップダウン） ① 制限時間内に読み終われない（問題点4） ② 部分的にしか理解できない（問題点3） ③ 語彙や文法に頼って逐語訳する傾向（問題点7） 本作業2（精読・語彙・構造理解） 難語や漢字を事前に確認。精読でキーワード・接続語・論理構造を把握。設問に関係する箇所を特定し、語彙の用例や図で理解を促進（ボトムアップ） ① 語彙や漢字が難しい（問題点1） ② 文法や表現が複雑で理解できない（問題点2） ③ 設問に答えるために必要な情報を読み取れない（問題点7） 本作業3（意見交換・協働学習） 答えや考えを共有し、相互補完。不明点を出し合い簡単なディベートも実施（ボトムアップ） ① 一名では十分に読み取れない（問題点7）→ 協働学習で補う ② 一名で抱え込みやすく心理的負担が大きい（問題点5）を緩和

手順	授業の流れの詳細
後作業 トップダウン活用	自分の言葉でまとめ、予測や意見と照らし理解を深める。質問作成・要約・関連文紹介などを通じて応用力を養う（トップダウン活用） ① 内容全体の把握や要点の抽出が苦手（問題点 3・6） ② 独自の考察や意見表現に苦手意識（問題点 7）を克服する

C1 レベル学習者への効果を検証するため、新授業モデルを 5 週間（週 1 回・各 100 分）実施し、前後に同形式の C1 レベル小テスト（各 30 分、2024 年 3 月 12 日・4 月 16 日）を行い結果を比較した。小テストは 3 問構成で、問題 1 は約 200 字の短文 2 本を読み各 4 問に答える。問題 2 は約 500 字の評論やエッセイを読み、筆者の主張や意見に関する 2 問に答える。問題 3 は約 600 字の文章を読み、比較・統合・全体把握を問う 2 問に答える。また授業の質について学生の意見も収集した。

〈表 7〉新しい授業モデルに関する調査結果

（調査期間：2024 年 4 月）

評価レベル	調査結果	
	モデル 1 (今までの授業モデル)	モデル 2 (新しい授業モデル)
不適切	6 名 (12%)	0
普通	44 名 (88%)	10 名 (20%)
適切で興味深い	0	40 名 (80%)

〈表 7〉の調査結果から学習者がモデル 2 で学ぶ方がモデル 1 と比べてより興味を持ち、効果的であると感じていることが明らかである。自由記述では、約 50% の学生が新しい授業モデルは読解の問題点を改善し、理解しやすく、意見交換や想像力を使う活動が多くて楽しいと答えた。

〈表 8〉新しい授業の質に関する調査結果

学習者	調査結果	
	小テスト 1 (名)	小テスト 2 (名)
グループ 1 (小テスト 1 の平均点が 5.0～6.9 点)	10 (20%) (平均 6.1 点)	7 (14%) (平均 6.5 点)
グループ 2 (小テスト 1 の平均点が 7.0～8.9 点)	24 (48%) (平均 7.6 点)	21 (42%) (平均 7.9 点)
グループ 3 (小テスト 1 の平均点が 9.0～10 点)	16 (32%) (平均 9.1 点)	22 (44%) (平均 9.3 点)

小テスト 2 の結果は小テスト 1 を上回り、新授業モデルにより学習者の理解・関心・読解力が向上したことが示された。

終わりに

本研究は従来の読解授業における課題を明らかにし、C1 レベル学生にとってより効果的な読解授業モデルを提案・検証することを目的とした。先行研究の理論的枠組みに基づき、現在ハノイ大学で使われている教材の内容と指導効果を分析した結果、C1 レベル学習者に適した教材であることが確認された。さらに授業実践の現状と課題を把握するため、学生 60 名を対象に調査を行い、学習者が直面する主な問題点を 7 つに整理した。その上でこれらの課題解決を目指した新しい読解授業モデルを設計し、5 週間にわたり実験授業を実施した。授業後のアンケートおよび読解力テストの結果から、多くの学生が新しい授業モデルに肯定的な評価を示し、読解力にも一定の改善が見られた。

以上の結果から、新たに提案した授業モデルは C1 レベル読解授業において有効である可能性が示唆された。今後はより長期的な視点からデータを蓄積し、学習成果の質的・量的変化を多角的に分析することで実践的指導法の確立を目指したい。また教材の利点と課題についても引き続き検討を行う予定である。

参考資料

1. Ikeda Nobuko (2016). Xây dựng tiêu chuẩn đánh giá đọc hiểu trình độ C1 trong giáo dục tiếng Nhật dựa trên CEFR. *Tạp chí Giáo dục tiếng Nhật số 45*, 78-93 (池田伸子 (2016)

CEFR に基づく日本語教育における C1 レベルの読解評価基準の構築. 日本語教育学会誌 第 45 号, 78-93)

2. Kakikura Yuko và cộng sự (2000). *Đọc hiểu tiếng Nhật cao cấp*. Nhà xuất bản ALC (柿倉佑子・その他 (2000) 日本語上級読解. アルク)

3. Oka Mayumi (2009). *Đọc nhanh tiếng Nhật dành cho người học trung – cao cấp (Tái bản lần thứ 2)*. Nhà xuất bản The Japan Times (岡真由美 (2009) 中上級者のための速読の日本語第 2 版. The Japan Times)

4. Quỹ Giao lưu Quốc tế Nhật Bản (2007). *Giảng dạy kỹ năng đọc*. Nhà xuất bản Kuroshio (国際交流基金 (2007) 読むことを教える. くろしお出版)

5. Tateoka Yoko (2001). Tự vấn và chiến lược giải quyết vấn đề trong quá trình đọc hiểu. *Nghiên cứu Giáo dục tiếng Nhật số 28*, 45-62 (舘岡洋子 (2001) 読解過程における自問自答と問題解決方略. 日本語教育研究第 28 号, 45-62)

6. Tanaka Kenichi (2018). Nhiệm vụ đọc hiểu và phương pháp giảng dạy cho người học tiếng Nhật trình độ C1. *Nghiên cứu Tiếp thu Ngôn ngữ thứ hai, số 40*, 55-74 (田中健一 (2018) C1 レベル日本語学習者の読解課題と指導方法. 第二言語習得研究第 40 号, 55-74)

7. British Council (2009). *Hiểu về Khung tham chiếu chung châu Âu về ngôn ngữ (CEFR): Hướng dẫn cho giáo viên (Understanding the Common European Framework of Reference for Languages (CEFR): A Guide for Teachers)*

8. Thân Thị Mỹ Bình (2021). Nghiên cứu về việc sử dụng giáo trình và tài liệu tiếng Nhật trong các môn chuyên ngành của Khoa Nhật Bản học. *Tạp chí Khoa học Vol.37 No.5*, 30-44 Trường Đại học Ngoại ngữ – Đại học Quốc gia Hà Nội. (日本語学科の専門科目における日本語教材・資料の使用についての研究. 科学雑誌 Vol.37 No.5, 30-44 ハノイ国家大学・外国語大学)

(Ngày nhận bài: 17/4/2025; ngày duyệt đăng: 30/9/2025)